

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18H00788

研究課題名（和文）呪術の存在様相：ナイジェリア都市住民の呪術経験に関する文化人類学研究

研究課題名（英文）Existential Aspects of Magical Practices and Witchcraft in Urban Nigeria

研究代表者

近藤 英俊（Kondo, Hidetoshi）

関西外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：40351556

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,000,000円

研究成果の概要（和文）：コロナ禍の影響で予定していた現地調査の半分しか実施することができなかったが、その中において現地調査、文献研究、コンファレンスの開催、執筆活動を可能な限り行った。

ラゴスでの現地調査では、呪術実践者・グループの儀礼の観察、彼らへのインタビュー、妖術の「被害者」へのインタビュー、一般市民の日常生活に関する長期的事例研究を行った。文献研究では、呪術だけでなく、それが依って立つ都市文化・社会の特質についても行き、その成果の一部はシンポジウムにおいて発表するとともに、論考として執筆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ある中年男性がラゴスの住宅地を車で走っていたところ、飛び出してきた幼児を轢いてしまった。ところが彼は事故の原因を当たり前のように妖術に求めたのである。そのときに限ってブレーキが利かなかったことも、子供が歩道側ではなく道路中央から突然現れたのも「奇妙」であり妖術を措いて説明できないというのだ。

この奇妙さは九鬼哲学を援用すれば「偶然性」に由来するものである。本研究の意義は、ナイジェリアの現地調査をもとに、偶然性＝必然性という矛盾した同一に呪術の本質を見出し、この同一性が顕在化しがちな場として都市を捉えるという新たな研究上の可能性を拓いた点にあると考える。

研究成果の概要（英文）：Due to the corona pandemic, I had to cut down the number of field works into half. This has seriously affected both quality and quantity of this study. Nonetheless, I have managed to cover most of the research agendas and employ the research methods according to the agendas, if not in their entirety.

These researches consist of 1) the observation of rituals conducted by practitioners and groups, namely, traditional healers, Pentecostal churches and Aladura churches, 2) interviews with these practitioners, 3) interviews with those who consider themselves to be bewitched, and 4) extended case study of the life of city dwellers.

Literature review is made not just for witchcraft but urban cultures and societies where witchcraft is experienced and has led to writing articles for publication.

研究分野：文化人類学

キーワード：呪術 偶然性 都市 ナイジェリア 冒険 希望 出来事 現代

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初、アフリカの呪術・宗教研究の潮流は、呪術をグローバル化の文脈で捉えること、とりわけ呪術を新自由主義がもたらす経済的格差と関連づけることにあった。それは呪術研究を地域伝統の枠組みから開放するものであり、私はその意義を認めつつも、同時に呪術の本質に関わる議論が回避されていると感じていた。この本質に関し、カドゥナでの調査経験から、私にはエヴァンズ＝プリチャード(以下 E-P)の有名な見解が再考に値するように思われた。E-Pによれば、アザンデ人の取り沙汰するマンガ(妖術)とは、西洋的にいえば偶然的事象を説明するものであるという。ところがこの見解はその後顧みられることがなかった。おそらく原因の一端は E-P が偶然性(contingency)を西洋的概念としながらも、その普遍性を前提としている点、そしてマンガを想起するに当たり、アザンデ人の関心は専ら事態の偶然性に向かう根拠を E-P が説明していない点にある。文化相対主義的な研究者にとって、それは西洋中心的な観点からアザンデ人の信仰を理解するものに映ったに違いない。この批判を超える上で意義深かったのが、九鬼周造の哲学との出会いである。

(2) 偶然性の普遍性については異論もあるだろうが、人間は誰しも驚くという驚異の普遍性について異論のある者は少ないだろう。九鬼によれば、驚異は当たり前なのが成立していないこと、すなわち必然性不成立に対する典型的な情緒的反応である。それは不思議、不可解、奇妙、理不尽等々なものとして経験される。必然性を欠いた状況とは偶然に他ならない。偶然性は驚異として経験され、必然性の存在を前提とする。さらに九鬼は驚くべき偶然性を前に、人はそこにかえて何らかの必然性、例えば神仏の力や運命を感じることもあるとし、それを積極的偶然性と呼んだ。積極的偶然性とはすぐれて宗教的なものである。この点にこそ、呪術的現実を理解するヒントがあるように思われるのである。アフリカにおいて、この驚異・不思議さは、呪術としばしば結びつき、ある種の必然性を獲得するのではなか。残念ながら E-P の民族誌にはアザンデ人の抱く驚きや不思議さへの言及がない。ところが E-P の継承者であるリーンハートの研究は、ディンカ人が神秘的カジョクを想うのは遭遇した事象の不思議さに起因することを明らかにしている。

本研究の着想は、今日の研究潮流の問題点、カドゥナにおける調査研究、E-P やリーンハートの研究、そして九鬼哲学を関連づけるなかで得たものである。それはまた私の長年の懸案である偶然性の人類学構築へ向けての第一歩を印すものだった。

## 2. 研究の目的

(1) 呪術とは、偶然性の驚異と不思議さを必然的に生じさせる存在、偶然性＝必然性という矛盾した等式を体現する存在の一つではなからうか。呪術の想起は起こった事に対する驚異・不思議さに端を発している可能性がある。反対に一度呪術が気がかりになると、一見取りに足らない事象の中に不可解なものを探すようになるのではないか。本研究の第一の目的は、呪術と驚異・不思議さとの相関関係を辿ることである。

(2) 研究の第二の目的は、呪術的現実の特性の探求である。偶然性の不思議さが呪術と結びつくことで、事象は呪術であれば当然起こりうるものに転化する。今や事象は呪術的必然性をもって語られ始める。この語りは、当事者にとってしばしば「現実」以外のなにものでもない。こうした呪術的現実、呪術の語りに、何か特徴的なことはあるのだろうか。私はカドゥナでの調査の経験から、妖術(人に危害を加える呪術)経験めぐる語りの内容が、顕著に変化するとともに語り手によって多様であることをという印象を持っている。原因として考えられるのは、呪術的現実が、唯一、驚くべき不思議な事象との遭遇によってのみ、そのリアリティーを保持できることである。妖術を懸念する者は日常生活の中で次々に不可解なものを見出し、その都度彼らの語りの内容は変化するのではないか。また、彼らが不可解なものを探す際、個人的人間関係や仕事など彼らの関心事からそれを始めるだろう。そうした関心事は人によって異なり、見出される不思議な事態も多様化するのではなからうか。こうした「出来事性」とでも呼ぶ偶然性を核とする現実の特性について、人々の妖術の語りを通し検証したい。

(3) 第三は観察しうる呪術ともいえる呪医、教会、イスラーム治療者の施術に関するものである。施術は大筋において託宣(占い)と袂いに分けることができる。託宣とは先行きの見通しや問題の真相などを明かし、人を一つの物語に沿って導くものである。ところが問題が長引くにつれ、託宣の結果は推移する状況を後追いするようになり、内容が著しく変わる可能性がある。一方、私が袂いと呼ぶ供儀等の儀礼は、クライアントの不幸を直接解決するというよりも、妖術等の影響を消し去り、その現実をひとまず出来事として終了させることを主眼としているように思われる。第三の研究目的はこれらの託宣の出来事性について探り、合わせてこれらの施術の商業化とペンテコステ派に顕著な原理主義の影響を明らかにすることである。

(4) 第四の研究目的は、呪術が利用される都市住民の生活の特質に関連している。呪術は住民の経験する幸不幸と密接に関係している。そして幸不幸はしばしば「出会い」として、唐突に彼らを見舞う。この想定外の出会いの多さと、それらへの対応の在り方に、住民の生き方の特質が如実に現れているように思われる。出会ったものが人であれ、情報であれ、組織であれ、彼らは失敗のリスクを厭わずこれらに賭ける、あるいはこれらを試す傾向が顕著に見られる。第四の目的は、こうした「冒険的」行為の実態を明らかにし、冒険に付随する彼らの「希望」の在り方について探求することである。

### 3. 研究の方法

(1) まずは全般的状況について言及したい。当初、現地調査はナイジェリア北部の都市カドゥナで行われる予定であった。カドゥナ近郊で誘拐事件が相次ぎ、外国人もターゲットにされていたこと、いわゆるシーア派のイスラームグループと治安部隊の衝突があったことを受け、調査地を急遽ナイジェリア南西部の都市ラゴスに変更した。ラゴスでは以前より親交のある医師や助産師の協力を得て、医師の病院兼自宅を調査のベースにさせてもらい、予定していた調査を暫時始めることができた。それは順風満帆の滑り出しではあった。ところがコロナパンデミックによってすべてが一変してしまった。

現地調査は2019年の夏に実施した第三回の調査を最後に続行不可能となった。合計10回の現地調査を計画するなかで、実施できたのがわずか3回というのは、現地調査を大前提とする本研究にとって致命的ともいえるものだった。状況の改善を期待し、研究の繰り越しを申請し了承を得たが、変異ウィルスが現れるなど不透明な状況は続いた。加えてナイジェリア政府がコロナ対策として発令した都市間の移動禁止が、経済に打撃を与えるとともに治安悪化に拍車をかけ、調査の実施はいよいよ困難になってしまった。以下では3回の現地調査で採用した調査手法と、現地調査以外の研究方法に関し、上記2の四つの研究目的に沿って述べる。

(2) 第一及び第二の研究目的は、呪術、とりわけ妖術の経験に関するものである。ラゴス在住の人々が、いかに妖術を経験しているのかを明らかにするのが目的である。そのためには妖術経験者へのインタビューが不可欠である。しかしそれに先立って妖術経験者を見つけ出さねばならない。私が3回の現地調査で採用したのは、妖術経験者が比較的見つけやすいと想定できる呪医、アラドゥラ系教会、ペンテコステ派教会のクライアントや信者へのインタビューである。彼らにランダムにインタビューする中で妖術経験者を見つけていく。問題は外国人研究者に妖術経験を明かすことに抵抗を覚える人々も少なくない点にある。数十名の人々にインタビューしたが、自らの妖術経験に関し詳細かつ信頼における情報を提供してくれたのは、4名に過ぎなかった。

(3) 本研究では過去の妖術経験の話聞くだけでなく、現在進行中の妖術経験について探る必要がある。そのためには同一の調査協力者に繰り返しインタビューするだけでなく、日常的に彼らと親交を深めることも肝要である。これが長期的な事例研究 (extended case study) と呼ばれる調査手法であり、第三回目の調査までに、近隣住民6名及び上記の教会の信者3名の協力を取り付け、彼らに対し長期的事例研究を開始したところだった。同時に、私が世話になっていた友人たちや調査助手をも研究対象とし、彼らの生活を垣間見ながらあわよくば呪術問題に遭遇する機会を窺っていた。

現地調査が頓挫してからは、これら調査協力者へのオンラインによる調査の可能性を模索した。試みようとしたのはWhat's Upを利用した携帯電話によるインタビューである。ところが現地の通信環境は悪く、彼らがインタビューに対応できるような携帯電話を持っていない上、機材や謝金の送付もままならない現実を前に、この案は断念せざるをえなくなった。やむなく以前カドゥナで実施した調査結果の偶然性＝必然性の見地からの再検討、並びにアフリカの呪術に関する民族誌的研究の渉猟に重点をシフトし、仮説の妥当性について探ることになった。

(4) 第三の研究目的については、ヨルバ人の呪医4人とイボ人の呪医1人の占い及び祓いの儀礼を数度にわたって観察し、全てではないが録音もした。第三回の現地調査ではビデオカメラによる撮影も実施することができた。彼らに対しては訪問するたびにインタビューも行っている。教会の活動に関していえば、アラドゥラ系教会三つ、ペンテコステ派教会二つ、その中間系ともいえる教会二つの礼拝や集会を継続的に観察した。これらの教会のリーダーには数回インタビューも行った。また、私は友人医師の病院兼自宅に住み込みながら、彼の治療をしばしば観察する機会を得た。

(5) 第四の研究目的である都市生活における出会い、冒険性そして希望の在り方の探求については、上の第一第二の研究目的の調査方法でもある長期的事例研究を援用した。ところが現地調査続行が困難になったせいで、ここでも文献研究に重点を移した。そして文献研究を通し仮説の正当性についてある程度手応えを得たことから、このテーマに関連した領域で優れた業績を上げているアフリカ研究者に呼びかけ、関西外国語大学の協力も得て、公開シンポジウム「アフリカの冒険的現代：偶然化に託す希望のチカラ」を二日間にわたって開催した。16人の研究者が参加し研究発表を行うとともに、テーマに関連して討議した。

#### 4. 研究成果

(1) 第一第二の目的については、わずか三回の現地調査で量的に満足いく民族誌的情報を集めることは困難だった。それでも集めた情報の中には以下のような事例もある。

これは中年のヨルバ人の男性の経験談である。あるとき彼はラゴス市内の住宅地の道をゆっくり車で走っていた。すると突然右後方の歩道から悲鳴が聞こえてきた(車は右側通行)。彼はブレーキペダルを踏んだが車はすぐに止まらず、左前輪が何かを乗り越えて止まった。降りてみると車の下に幼児が横たわっていた。すぐさま女性が駆け寄って来て子供を抱き上げたが、子供はぐったりしたままだった。彼は子供と女性を車に乗せ病院へと向かう。子供は亡くなり、一時彼は留置所に入れられたが、ほどなく釈放された。ところで彼はこの悲劇の原因を妖術に求めた。なぜ妖術なのかという私の質問に対して、「とても奇妙(very strange)」だからなのだという。第一にその時に限ってブレーキが利かなかったのは妙である。第二に保護者の女性は車の右、歩道側にいた。子供が保護者の方から車道に出てきたなら車の右側で轢くはずである。ところが子供は車の左前輪で轢いている。つまり子供は道路の中央付近に忽然と現れたことになる。

他の事例においても、奇妙さ、不思議さが妖術を想起する根拠の一つとして挙げられている。彼らは起こった事に対し驚きを感じていたいってよかろう。それは仮説を支持する結果とはいえるが、事例数は少なく「証明」とは程遠いものである。その一方で、私は既存の民族的研究のレビューを通し、仮説の検証を進めてきた。これらの研究はその大半が驚きや偶然性を主題にしているわけではないが、詳細な事例報告の中に、当事者が事態の不可解さと妖術を結び付けているケースが少なからず見つかった。一例を挙げるなら、有名なアッシュフォースの研究において、彼の調査助手が呪われたと思い込むようになるきっかけは、幸運に恵まれていたはずが一転、母親殺しの嫌疑をかけられ家を追い出されるという驚くべき事態とその不条理さにあった。

(2) 妖術的現実の出来事性、すなわち妖術の語りの著しい多様化と変化、は調査にとりわけ時間を要するトピックであり、長期的事例研究が不可欠である。ここでも現地調査の中断は大きな痛手となった。とくに惜しかったのは、妖術等の神秘的力に懐疑的だった私の調査助手が、第3回の現地調査中、そうした力の影響下にあることを案じ始め、忌避事項を守るなど対処策を講じるようになっていたことである。それは事の成り行きをいわば目と鼻の先で追跡調査できる絶好のチャンスだった。結局このトピックについても文献研究に重点を移すことになった。文献研究では、慶田、浜本、山口ら日本人研究者の詳細な事例報告に妖術的現実の出来事性を見て取ることができたが、現状では欧文の文献への目配りが不十分である。

(3) 第三の研究目的の達成度だが、呪医の託宣と祓いの儀礼については数多く観察し、録音・録画も行ったが、同一のクライアントが託宣や祓いの儀礼を受ける模様を、幾度も長期にわたって観察するまでは至っていない。同様にしてアラドゥラ系教会における憑依の観察も単発的段階に留まっている。ペンテコステ派の「解放の儀礼(deliverance)」は観察する機会にもあまり恵まれなかった。総じていえば、これらの儀礼の出来事性には踏み込めていない。施術の商業化や原理主義の影響に関する調査もこれからというところで頓挫してしまった。これが3回の現地調査の限界というものだろう。

(4) その一方で新たな発見もあった。それはこれらの施術師にとって、今や携帯電話が施術をする上でなくてはならないものになりつつある点である。ある呪医はしばしば携帯電話を通して託宣を行う。彼はクライアントの携帯電話を通して要望を受け付け、通常のやり方で占いを行う。そしてその結果を再び携帯電話でクライアントに知らせる。クライアントは呪医のもとを訪れる必要がない。このやり方によっておそらく海外のクライアントに対しても託宣を行えるだろう。祓いや治療のための祈祷までも、携帯技術によりリモートで行うことができる程度可能である。私の滞在する病院に意識のない重篤な患者が搬送されてきた。医師にはすでに手の施しようがなかった。ところが患者の家族は一縷の望みを携帯電話につないだ。患者の耳元に携帯電話を当て、話者が電話口で行っている祈祷を聞かせようとしていたのである。彼らはペンテコステ派の信者であると推測される。

(5) そして第四の研究課題だが、第三回目の現地調査でようやく長期的事例研究が緒に就き、この課題についても情報が集まり始めていただけに現地調査の中止は極めて残念である。しかしながら、都市生活における「出会い」「冒険」「希望」の意義については、既存の文献研究によってある程度埋め合わせることができた。文献研究はアフリカの都市生活者や起業家に関する民族誌的研究に焦点を置いた。なかでもアブドゥマリク・シモンの研究は実証的にも理論的にも本研究の大いに参考になった。そして冒険と希望に関連して、日本のアフリカ研究者の動向を明らかにすべく、公開シンポジウム「アフリカの冒険的現代：偶然化に託す希望のチカラ」を開催した。

まず私の呼びかけに対し、小川さやか氏や松田素二氏をはじめ活躍中で多忙な研究者がすぐに応じてくれたことに、このテーマに関する関心の高さがうかがえる。個人研究発表で扱われた研究対象は、ナイジェリアのビジネス、南スーダンの宗教、ガーナの葬儀、タンザニアの身体障碍、ボツワナの狩猟採集生活等々多岐にわたるが、それぞれ冒険や希望について考えるところを述

べてもらった。発表者によっては私とは見解が異なることもあったが、豊富な現地調査に裏付けされた研究には説得力があり大いに刺激になった。とりわけ痛感したのが、希望に関し圧倒的に重要なのは、当事者を取り巻く人間関係であるということだった。この点は私の研究に欠けており、このシンポジウムの最大の収穫といえるものだった。

(6) こうした都市生活者の冒険性と呪術の関係については、文献研究とシンポジウムから一つの見通しを得た。一方において冒険性は呪術を促進するとともに、その信頼性を揺るがせ、呪術的現実＝呪術の語りの出来事性を高める可能性がある。幸不幸を結果する出会いは、その呪術的解釈＝呪術的必然化を招きやすいのではないか。それでいて相次ぐ出会いは呪術的現実を不安定なものにしかねない。他方において呪術は冒険性を促す可能性がある。新たな出会いに賭けるか否か躊躇する者にとって、占いや予防的呪術はいわば背中を押す効果があると考えられる。また冒険的事業の失敗が外部の呪術に起因せしめられるなら、当事者は別段反省することなく新たな事業に移行できるのではないか。この見通しを確かなものにするためには、今後さらなる現地調査が必要だろう。

(7) 総合的に見て、本研究は私の長年の懸案である偶然性の人類学の構築に資するものだった。これまで文化人類学は、何が当該人々にとって当たり前なのかという文化的必然性の探求に終始していた。これに対し、少なくともナイジェリア都市住民は当たり前でないことに多大な関心を寄せ、それを呪術的に理解し、呪術的に対処しようとする。本研究を通し、不可解な文化的偶然性の文化人類学上の意義と、それを必然化する呪術の本質が確認できたと思う。

(8) 以上の研究成果については、「偶然と必然を結ぶ妖術」(2020年『現代世界の呪術』所収)や「宗教生活」(2023年『アフリカを学ぶ人のために』)など、その一部が出版されている。現在、研究成果を取り入れた単行本『流転の冒険者たち(仮題)』の執筆を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 川田牧人、白川千尋、飯田卓、近藤英俊、中村瑞穂、藤本透子、島園洋介、浜田明憲、田中正隆、片岡樹、中川敏、黒川正剛、津村文彦、村津蘭、飯田淳子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 470
3. 書名 現代世界の呪術	

1. 著者名 松田素二、松村圭一郎、小森淳子、伊谷樹一、曾我亨、飯田卓、近藤英俊、et al.	4. 発行年 2023年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 343
3. 書名 アフリカを学ぶ人のために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>本研究のテーマの一つである冒険性と希望に関して、アフリカ研究者16名による発表と討議の場、公開シンポジウム「アフリカの冒険的現代」を2023年3月5日・6日、関西外国語大学にて開催した。</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------